

## 村松梢風と中国

——田漢と村松，村松の中国に対する姿勢などを中心に——

### 小 谷 一 郎

私がここで村松梢風を取り上げてみたいと思ったのは次にあげる田漢の一通の手紙からである。この手紙は1928年10月、雑誌〈騒人〉第3巻第10期に前年日本を訪れた欧陽予情の手紙と共に「上海便り」と題して掲載された。手紙には〈騒人〉のために原稿を書きたくありません、「一支那青年としての僕は済南事件に付いてあんなに田中政策を支持した貴兄を応援する理由がありません。随喜する勇気がありません」という非難に続いて、こう書いてある。

貴兄は「新しき支那」を観察したいとおつしやる。残念ながら支那は決して新しくなつてゐません。世界資本主義復辟潮流に影響されて日一日古くなつて往くばかりです。マルクスは莫論、孫逸仙までも泣んでいます。今度御来遊の節その泣声を即ち聞き取れるでせう。だが孫逸仙の泣声はやがて支那民衆の泣声ですから聴いて貰つてもいいでせう。お為になるでせう。真の支那通と自称してゐる貴兄よ、支那は永遠の謎でも何でも無い。だけれどそれを別として人は真人間でなければなりません。御来滬を待ち遠してゐます。

「貴兄」とは無論〈騒人〉の編集者村松梢風である。村松梢風（1889～1961）は本名を秋田義一という。彼は1917年（大正6年）「琴姫物語」（〈中央公論〉8月号）が編集長滝田樗陰に認められたことによつて世に出、25年まで〈中央公論〉「説苑」欄の常連執筆者として活躍、当時は『朝妻双紙』（アルス社 大正7年）に代表される「情話もの」、『本朝画人伝』（中央公論社 昭和15年～18年）などに代表される「評伝もの」の作者として知られた。彼と中国との関

わりは深い。彼は23年からたびたび中国を旅行して、『魔都』（小西書店 大正13年）をはじめとする多くの中国旅行記を残し、そしてまた、後述するように、同時代人として田漢、郭沫若、郁達夫をはじめとする創造社同人、歐陽予倩などの中国の若き芸術家達と接触した最初の日本人作家でもあった。

村松が済南事件を支持したことは〈騒人〉第3巻第6期（28.6）の「巻頭語」などに窺える。「巻頭語」は寸言で社会批評を試みたものだが、村松はこの時その冒頭から、「山東出兵大賛成だ。ドンドン出兵して、蒋介石だらうが張作霖だらうが、日本の云ふ事を聞かぬ奴は片ッ端から踏み潰してしまへ」、「支那人相手に口喧嘩をしてゐたら夏の日が一年あつても足りないぞ。日本には何の為に兵隊がある」、「豹狼に等しい支那の軍閥を踏み潰して終ふはうが、支那の国民の利益になる」、「済南で豆を煎る位鉄砲が鳴つた」、「あの屁っぴり腰の田中外交でも、民政党では軍国主義だといふから笑わせる。田中さんも飛んだ器量を上げたもの」、「支那では兵隊が暴行。日本では巡査が暴行」と書いていたのである。

村松と田漢の友誼は残念ながら時代の中で崩れる。だが、田漢がここで村松を非難したのは単に彼が済南事件を支持したという一事からだけではないだろう。それは田漢の「真の支那通と自称する貴兄よ」という言葉が象徴している。つまり、ここには村松の中国に対する姿勢をめぐる問題が残っていると思う。

この点について、村松と中国を取り上げた唯一の論文である春名徹の「蕩児の帰宅——村松梢風と中国」（〈世界〉83年11月号）は20年代中期の村松と「上海」を書いた横光利一、「支那」を書いた前田河広一郎とを比較し、「これらの動きにくらべても、いち早く国民党政権の統一政権としての地位を認め南京に赴いて若い中国の可能性をさぐるうとした梢風には、文学的にはともかく少くとも政治的には一日の長があった」。そして、それは村松が「田漢、郭沫若、郁達夫、歐陽予倩ら創造社系の中国作家と早くから接触があったこと」、「それ以上に、梢風は現実に五・三〇事件直後の上海を目撃し、政治についてある種の感触を獲得していた」からだという。だが、果してそうか。春名はそこで済南事件を支持した村松について触れていない。しかも、村松が南京に赴

いたのはこうした出来事の後、28年11月からのことである。とすれば、先の引用に続く、春名の「反帝国主義運動で中国商人が店をとぎした上海の街を梢風は歩いて、女のもとへ急いでいく。政治も人生も彼の前にまさに併存していた。その双方に固執することが、彼の主張する『政治と文芸との接触、融合、一致』ではなかったか」という指摘も、改めて違う角度から検討し直してみる必要があるだろう。

小論は以上のようなことから、村松と田漢との往来、村松の中国に対する姿勢などを見つめてみようとしたものである。

—

村松が田漢と知り合ったのは23年春彼がはじめて中国に行った時のことである。芥川はこの2年前、21年の3月から7月まで中国を旅行した。だが、芥川が中国を訪れた時、日本と関わりの深い創造社は留学先の東京で結成されたばかりだったし、内山書店を「サロン」とする支那劇研究会もまだ開かれてはいなかった。このため芥川は中国の若き作家たちと交流していない。先にも書いたように、村松がこの時創造社の田漢たちと交流したことは、中国の若き作家たちと日本の作家が同時代人としてはじめて接触したという意味で特筆に値する。

村松はこの時3月31日に長崎丸で長崎を発ち、5月1日から南京に2日、蘇州に1日、5月9日から3日杭州に遊んだほかは、すべて上海に滞在した。帰国したのは5月の下旬で、上海滞在中の事どもは帰国後に書いた印象記「不思議な都『上海』」(〈中央公論〉23年8月号、後に単行本『魔都』にまとめる)に詳しい。

それによると、村松は旅行に先立ち佐藤春夫から田漢宛の紹介状を貰っていた。佐藤と田漢は21年10月、田漢が上目黒にあった佐藤宅を訪ねて以来の友人である。佐藤は後にこの時の事情を「帰国して後も田は時をり才気の溢れた文章で手紙をくれた。けれども筆不精な私は悪いと思ひながら一べんも返事をしなかつた。それなのに村松が上海に遊ぶことになった時、私に誰か紹介しろ

といふので私は田を紹介した」と書いている<sup>1)</sup>。

村松が田漢を訪ねたのは彼がまだ西華徳路の日本旅館豊陽館に泊まっていた時のことというから、おそらく4月の下旬頃のことであつたろう。その日彼は佐藤の紹介状を持って「支那の新しい青年文士」田漢を静安寺路の「中華書局編輯局」を訪ねた。二人は会うとたちまち「一見旧知のやうな気持で話し始め」、村松はすぐに編輯所に程近い田漢の家に案内された。

田漢(1898~1968)はこの前年、22年9月に7年間留学していた日本から帰国し、それと同時に同郷で、同じ少年中国学会会員でもあった左舜生(当時は中華書局編輯部主任)の招きに応じて中華書局編輯部文化部に入り、哈同路民厚北里406号に住んだ<sup>2)</sup>。村松が訪ねた時、田漢の家には妻易漱瑜と、この年の1月24日に生まれたばかりの一子海男、それに海男の世話という名目で郷里湖南省長沙から出てきていた田漢の母易克勤、田漢の三番目の弟田洪、易漱瑜の母陳氏が住んでいたはずである。

村松は田漢の家で二階の書齋に通される。村松はここで5時頃まで「上海へ来た自分の目的など」、田漢は「現在の勤め先でしてゐる仕事のことや、将来の計画」、「彼自身としては将来ドラマチストとして起つ積りだ」、「友達ばかり集まつて『創造』といふ雑誌を發行」していることなどを話した。村松はその夜さらに、田漢の案内で新世界に行き、田漢が「所謂民衆芸術としても相当に価値のある物」と推賞した「太鼓」を聞いている。

田漢と村松はこの後も度々会つた。村松は上海で先の豊陽館に住んでいたが、上海に慣れてくると老靶子路にあったロシア人の家に間借りした。村松はここで小説「上海」に出て来る「赤城陽子」(「不思議な都『上海』」の「Y子」、本名、芳子)と知合い、同棲を始める。村松が田漢から自宅での晩餐に招かれたのはそうした時の一日で、村松はこの時「田君なら気の置ける人でもないから」と思い彼女を連れて田漢の家に出かけた。村松はここではじめて郭沫若、成仿吾、それに黄日葵、中華書局の編輯局員などと出会う<sup>3)</sup>。この日の料理は田漢の母易克勤、弟田洪が作った「湖南省の田舎の料理」であつた。村松はこの料理が「素人料理とは思はれない程凝つてゐて美味だつた」という。郭沫若

はこの3月に九州帝大を卒業、4月1日上海に戻り、妻子と共に成仿吾の居る民厚南里東五弄121に住んでいた。村松はこの後「私の家も直ぐ近くですから」と郭沫若の家に呼ばれる。村松は郭沫若に対し、「色が白くて、強度の近眼鏡の下で少し飛び出している眼には、芸術家らしい無邪気さと陰鬱な悩みとを漂はせている」と、成仿吾には、「非常な静かな人で大抵は黙つて人の談話ばかり聞いてゐる。が、偶に一言位ボンと人の談話の中へ抛り込む。それが胡椒のやうにピリ、と来る。まことに天性の批評家らしい」という感想を持った。

村松はさらにこの「二三日後」、田漢、郭沫若、成仿吾の来訪を受け、四川料理の「美麗」で会食した。そして、ここは郁達夫も加わった。郁達夫は郷里富陽に妻子を預け上海に戻って来たばかりであつたろう。この日の会はY子と田漢が歌い、郁達夫と郭沫若が「拳みたいな事をして」、「みんな勝手に何かやりだした」、「とにかくみんな酔つぱらつて愉快になつてしまつた」という楽しい会だったらしい。創造社の歴史でいうと、郁達夫、郭沫若、成仿吾の三人が揃い、〈創造〉季刊に加え、まもなく〈創造週報〉(23.5)〈創造日〉(23.7)を創刊するという、創造社が最も勢いのいい時代を向かえていく、その前夜のことであつた。

## 二

村松は『魔都』の「序」の中で、この時中国旅行を行った動機について、「そもそも私が上海へ行つた目的は、変わった世界を見ることにあつた。変化と刺激に富む生活を欲したからのことであつた。私の其の目的には、上海は最も適当した土地であつた」と書いている。春名は先の論文でこうした村松と芥川、谷崎を比較し、芥川や谷崎には「自分のなかの中国文化への憧憬、ないしは中国趣味を、現実の中国という場で確認してみる、といった趣がある」、「ところがこれに反して梢風は、直截に、日本における享樂には飽きたから、刺激の強い上海のような土地に行つてみたかったのだ、といったのけた」と書いている。だが、村松はこの時、単に「日本における享樂には飽きたから」、「刺激

の強い」中国に出かけたのであろうか。この点でいうと、私はむしろ次に引く「梢風物語」の方が事実に近いように思う。

村松は昭和28年5月新潮社から出した『現代作家伝』の終わりに自分の「作家伝」、「梢風物語」を収めている。そして、そこには『朝妻双紙』（大正7年）の後、『談話売買業者』（大正11年）がアルス社から刊行されたという記述に続いて、こうある。

その前年の秋芥川が中国に行った。梢風は芥川の行動に刺戟された意味もあったが、彼は自己の行詰りの打開を端的に中国に求める気持ちであった。その意味では彼の意図は完全以上に成功だったといえるが、その結果は、梢風は35歳から人生の一番胴まん中を十数年にわたって中国へ没入することとなるのであった。

村松という作家は一口でいうと「足で書く」作家である。つまり、小説の種を直接何かに取材して、それを彼自身が再構成するというタイプの人である。たとえば、滝田栲陰に認められた「琴姫物語」にしても「上野広小路の夜店で買った街談文々集要(?)といふ化政時代の変つた市井の出来事を記録してある本の中から種を拾つて」書いたものだし、「朝妻双紙」も本人が吉原の花魁稲葉のもとに「十五日間一晩も休まず」通い続けて聞き出した「身の上咄」をまとめたものである。ただ、『談話売買業者』はちょっと違う：彼はここで作家に小説の種を売る談話売買業者という「作家の脳裡に描かれた一個の空想人物」を描いた。ここには「現代の我国の文芸が余りにリアリズム一方に偏してゐる傾があるから」、「現実を尊むは宜なり、現実に拘泥し、身辺数尺の小天地に跼蹐して、想像界の广大で且奔放自在の味ひを知らずして終る人は、自ら翼を捨てる鳥の如く愚かしくも亦憐むべき極みである」という彼なりの思いがあった。しかし、この試みは同時にまた彼に、「処が凡庸な私の想像力は、矢張り、身辺数尺の域を脱し得ないのであつた。我が談話売買業者の言葉を籍りて云へば『通常の人間の想像の及ぶ程度の事なら何処にでも転がつてゐる』ことを始めて知つた」、「作品の形式に於ても私は出来るだけ伝統や常習を斥けやふ」と努めたのだが、「現在のわたしといふ人間以上には出て居らない」（『談

話売買業者』「序」)という思いも抱かせたのである。村松がこの時「行詰り」の状態にあったかどうかは定かではない。だが、この時の村松が作家として新たな展開を求めていること、どこかに新境地を開きたいと思っていたことは確かであろう。

たとえば、村松が帰国後に書いた小説「ラシャメン」(『騒人』第2巻第8期27.8)には次のような「私」が登場する。この小説は「これは私が始めて上海へ行つた時のお話です」という書き出しではじまり、次に「私」が上海に抱いていたイメージ、実際の印象が綴られた後、こう続く。

私は彼地で目茶苦茶に人に会ひました。平常の羞かみやにもにずどんな人間とでも機会があれば会つて名刺の交換をしたり談話を交へたりすることを努めてしたのです。勿論相手は日本人ばかりでなく支那人もあれば西洋人もあります。其の中には紳士もあれば破落戸もあり、俳優、政治家、新聞記者、淫売婦、貴婦人、探偵、詐欺師……と雑多の階級がありました。さふいふいろいろな人に会つていろいろな話に接して見るのが、とりも直さず私自身の修行の一つで、そしてそれは、かうして外国へでも踏み出した時でなければ味ふことのできない経験であると私は考えてゐたのです。私の考は非常に真面目でした。

自ら「芥川の行動」に刺激されたと語り、また詩謎などに「古雅」を覚える村松<sup>4)</sup>は一面では広い意味での「支那趣味」だったのかも知れない。だが、村松の「支那趣味」は動機というよりも結果である。村松は中国に行くことによって逆に彼の「支那趣味」を確立したと考えられる。

村松は上海に行き「此の上海位面白い土地は世界中探したつて他にはあるまい」と思った。村松は上海、とくに租界の「政治上の主権を失つてゐるばかりでなく」、「支那の伝統的文明も無ければ精神も無い、支那でもない西洋でもない一種の変形的生活」の中に「自由」と「解放」とを感じる。村松は同じ「不思議な都『上海』」の中で、「私を惹き付けるものは、人間の自由な生活である。其処には伝統が無い代りに、一切の約束が取り除かれてゐる。人間は何をしようとする勝手だ。氣随氣儘な感情だけが生き生きと露骨にうごめいてゐる」と書い

ている。そして、村松がそこで出会ったたくさんの人々、たとえば、「上海」に出て来る朱福昌、花旦緑牡丹、赤城陽子、「ラシャメン」の坂田蝶子などがその後の作品世界を彩ることになる。

作家村松という観点でいえば、この時の中国旅行は確かに「完全以上に成功だった」。帰国後の彼はこれまでの「情話もの」、「評伝もの」の世界に、「支那もの」とでも呼ぶべき作品を加え、以後毎年のように中国を旅行し、『魔都』、『上海』(騒人社 昭和2年)、『支那漫談』(騒人社書局 昭和3年)などをまとめる。だが、村松梢風と中国という観点からすると、問題はすでにこの最初の中国旅行の時から内包されていたといわなければならない。

### 三

村松と田漢の友誼は村松の帰国後も続いた。村松は滝田樗陰の死後、26年4月に個人雑誌〈騒人〉を創刊した。この雑誌は村松が「近時雨後の筍みたいに現はれる下品な雑文ゴシップ雑誌の亜流ではないから其のつもりで見て貰ひ度い。と云つて大衆なんとかいふ仲間入りも真つ平御免だ。大衆と云へば万人向きのことで取も直さず通俗だ。由来自ら万人向きを標榜するものにロクな物はない。少数でもいいから僕は具眼の読者を欲しい<sup>5)</sup>」といってるから、「公論」と「文芸欄」との間であって随筆や軽い読物を載せていた〈中央公論〉「説苑欄」を彼なりに意識したものであったろう。村松はこの雑誌を創刊号から田漢に送っていた。〈騒人〉第1巻第3期(26.6)に掲載された田漢の村松宛書簡「上海通信」はそうした村松に対する田漢の礼状である。手紙には村松が〈騒人〉に連載し始めた小説「上海」に触れた部分があり、田漢はそこで村松と「赤城陽子」との関係の問題にし、「あんなに熱烈な恋人同志が四五ヶ月も経たない内にもう別れた。……中略……然し梢風兄！ 貴兄はまだ幸福ですよ。……中略……僕にも恋しき人がありましたが生かすべくも永久にそう云ふ機会には巡つて呉れないんだ」と書いている。田漢は村松が27年に「此の大不幸が一時は殆ど田君に取つて致命的打撃となつたらしく其の後の生活態度の現れが余程変つて来た<sup>6)</sup>」と書いているように、この2年前24年1月24日に最愛



の妻易漱瑜を失った。易漱瑜は田漢の従姉妹に当る人で、田漢の良き理解者であったばかりでなく、24年1月に創刊した〈南国半月刊〉を共に支えた唯一の協力者でもあった人である。「上海」を評して「此は人生の実相でせうか？恋愛の本当の姿でせうか？」という件はそんな田漢の村松の「恋愛」に対するちかかしたも、また、穏やかな批判とも受け取れる。

手紙にはまた後の村松に対する批判に重なるこんな部分がある。田漢はここで村松が「支那画人伝漫読」(〈騒人〉第1巻第2期 26.5)の中で「現代では支那人は決して冷水で顔を洗はない。必ず熱水を用ゐる。況んや水を飲む者などは万人に一人もない」と書いたことを取り上げ、「然し事實はそうでもないんだ」といくつかの例を挙げた後、こう書いている。

貴兄のあの「漫読」をよんでから観国と云ふ事がなかなか容易な事ぢやないと深く感ずる。殊に支那と云ふ国はあまり広いですから、ある一部分を見て直ぐ全部を断定するととんだ間違が出来る。ですからもう一度此の国へ遊びにいらしやい。清い水で顔を洗つたり、飲んだりする所へ御案内しますから。

田漢と村松の交友という点、どうしても27年の田漢の来日について触れて置かなくてはならない。田漢はこの時、易漱瑜の父易梅園の友人で南京政府の軍人だったという雷震天鳴と6月20日頃来日した。問題はこの時の「南京国民政府総政治部宣伝処芸術科顧問電影股長」という田漢の肩書である。田漢は四・一二クーデター後の状況下で、5月に陳銘枢の關係で宣伝処主任をしていた何公敢の要請を受けて、欧陽予倩、唐槐秋夫妻、顧夢鶴等と共に南京政府に入った<sup>7)</sup>。何公敢は元來が國家主義団体〈孤軍〉派の中心メンバーであり、24年10月いま一つの國家主義団体〈醒獅〉派が〈醒獅週報〉を創刊した時、その発起人にもなった人物である<sup>8)</sup>。そして、田漢は25年8月から26年3月まで、この〈醒獅週報〉の特刊〈南国特刊〉を編集していた。田漢研究という観点からすると、田漢がなぜこの時蔣介石の南京政府に入ったのかということは國家主義と北伐との關係など、いくつかの重要な問題を含んでいるのだが、そうした田漢側の問題はいま置く。

田漢たちはこの時神戸に住んでいた谷崎の家に何泊かし、6月26日に上京、29日までの4日間東京に滞在した。東京滞在中のことは佐藤春夫の身辺雑記風の小説「人間事」(『風雲』宝文館 昭和16年8月 所収)に詳しい。田漢はこの時小石川区関口町207に新築されたばかりの佐藤春夫宅に泊まり、実に精力的に動いた。彼はわずか4日の間に改造社山本実彦主催の歓迎会、菊池寛主催の歓迎会、高田保の渡欧送別会に出席、築地に前衛座の「プリンス・ハーゲン」を觀に行つたほか、神田の騒人社、千駄木の前衛座、金子光晴宅、中河与一宅、秋田雨雀宅、月印精舎などを訪ね、武者小路実篤と会つたりなどした。そして、村松はこの間、ほとんど田漢に付ききりで案内役をつとめた<sup>9)</sup>。

田漢がこの時国民政府芸術科顧問電影股長の肩書で来日したことは村松たちの間でも問題になった。田漢は29年にこう書いている。雑司が谷の秋田雨雀の家を訪ねた時、秋田はソビエト行の直前で、パスポートを見せながら私に同行を求めた。「けれど残念なことにその時ちょうど前田河広一郎が私を“反動”とそしり、村松梢風が“方向転換”と言っていた時だったから、返事が出来なかった<sup>10)</sup>」と。だが、村松は「方向転換」とは書いていない。村松は「騒人録」(〈騒人〉第2巻第8期 27.8)中で「彼の親友郁達夫君は上海を亡命し、郭沫若君は漢口政府の政治部に在つて辣腕を奮つてゐる時、田君は蔣介石の政府に粟を食むでゐるのは方向転換のやうにも見えるが決して左うでない。田君でも郁君、郭君にしても決して単なる芸術家でないと同時に単なる政治青年ぢやない。僕の視る処を以てすれば、彼等は一様に、芸術のために政治を利用し、政治のために芸術を利用しつゝあるやうに思ふ」と書いていたのである。

#### 四

村松の出していた〈騒人〉は27年2月、第2巻第2期から「時事問題」を載せるようになった。村松はその意図を、「文芸雑誌だからつて全然時事に容喙することができないんぢやあ余り心細い。いや、文士だからつて小説や講談ばかり書いてればいゝといふものぢやない。そんな狭い考へを有つてゐたんでは良い文芸も生れやしない。私は月並の政治家や論客を拉し来つて本誌を彼等

の発表機関化さうとは思つてゐない。寧ろ吾れ吾れの方から積極的に彼等の領分へ喰ひ入つて行くことを考へてゐる。政治と文芸との接触といつたやうなことを唱へる人も少しはあるが、両者を接触させたいにも既成政治家の連中を相手ちや問題にならん。吾れ吾れは勝手に自己の思想主義主張に基いて政治にも触れて行く考へだ<sup>14)</sup>という。そして、村松はこの号に「対支外交に関する論文」、「南北調停論」を書いた。

村松はここで北伐軍が武漢に入った状況を「支那の中心勢力が截然として南北に分立してやゝ互角に近い形成を示したのは今回が最初である」と捉え、北の張作霖政権と南の広東政府とが中国を二分して「平和な二国」を樹立することが「あらゆる国情から云つて当然の帰結」である。そして、これには「外国の調停斡旋をいゝが最も近道」で「此の際我が日本が率先して此の大事業に着手するのが対支政策の最も高踏的なものである」と、日本の中国に対する積極的な関与を主張した。村松はこの末尾「附記」の中で、「日本の政治家が此の期になつてもまだ北方正統南方国賊式の旧觀念に囚はれてゐると将来日本は飛んだ目に逢はなければならん」と書いている。一見すれば広東政府擁護論にもみえるが、しかし、村松の主眼はそこにはない。村松の論の基調は「東洋平和の理想」を担う日本、その日本の積極的な中国介入支持である。村松はこれを後に『支那漫談』(騒人社 28.5)の中に収めた。そして彼はその時、執筆年月日はそのままにして、「附記」を全面削除し、新たに「世間往々支那に対する内政不干渉論を耳にする。さういふ論者からは私の此の南北調停論も一種の内政干渉論の如く見られるかも知れない。その当否は別としても、一体内政干渉が何故悪いと私は云ひ度い。悪意私欲を藏する干渉だつたら悪いに違ひないが、相手の国家及び国民の幸福を招来する処の干渉であれば何の憚る処があらう。隣人の家庭の乱れてゐるのを見て好意的干渉をすることは人倫の本道である」という一節を書き加えているのである。

私は先に、村松と中国をめぐる問題は彼が最初に中国旅行を行った時からすでに内包されていたと書いた。その意味はこうである。

村松にとっての中国とはいうなれば作家村松が見いだした、対象としての中

国とっていい。それは問題ではない。問題はその時の村松の姿勢である。村松は先に見たように、租界の生活に「自由」と「解放」を覚え、そこで「俳優、政治家、新聞記者、淫売婦、貴婦人、探偵、詐欺師」という様々な人々と出会い、彼のいう「天国であると同時に」、「地獄の都」上海に「惑溺」した。村松はそこで実のびのびと振舞っている。村松は日本での「蕩児」。村松の生活をそのまま中国に持込みなんらの違和感も感じていないとっていい。このことは村松が『魔都』の「序」で「私は雀踊りして其の中へ飛び込んで行つた」と書き、国民党交際部副部長周頌西の上海の「何処がそんなに面白いのでせう？」という問いに対し、「吾れ吾れは此処では全く解放されてゐるでせう。それが私に取つては何よりも有難いのです<sup>12)</sup>」と答えていることによつても明らかである。だが、この姿勢は対象との間にはじめから緊張を欠いた姿勢とっていい。そこには対象によつて逆に自己を見つめ直すというような姿勢、視座が欠けているのである。しかも、この時の村松の眼には植民地上海の置かれている状況、いいかえれば、中国の置かれていた歴史的状況、政治的状況などは見えていない。むしろ、村松はそうした世界を現出してくれた植民地上海を肯定してさえいる。つまり、村松は対象を状況の中で考え、それを歴史的、政治的に捉えていくという姿勢が希薄で、ただ単に対象と無媒介に接触しているだけなのである。

こと中国に限らず、だが、対中国において最も突出したこうした姿勢は何も村松だけのものではない<sup>13)</sup>。しかし、村松の場合はさらにその後の次のような中国に対する姿勢の中に問題があったといわなければならない。

それは村松の中国に対するスタンスの問題とっていい。村松は〈騒人〉の創刊号(25.4)に「芥川氏の『支那遊記』を評す」を書いた。彼はそこで芥川の『支那遊記』を「処で此の旅行記は、芥川龍之介を看るべき為の旅行記だ。決して支那といふものを深切に読者に紹介しそれに依つて何事かを教へようといふ種類のものではない」、「前に私は此の人の写生の筆致に驚嘆したが、其の細密描写が必ずしも物の真相を伝へてゐるとは云はない。芥川氏の本領であり、それが長所となり欠点となるものは、矢張り其の才と学識とである」と評して

いる。そして、これはおそらく『支那漫談』の「序」の「私は支那が無闇に好きなのである。好きにも幾通りかあるが、私のは恋である。支那は私の恋人だ。恋人の事だから無闇に語りたがるのである。或人曰く、君の支那礼讃もいゝが、左様に盲目的に心酔し、感溺しては、真正の研究はできず、正鵠なる批評を失するであらうと。或ひは然らんだが、然し乍ら私は矢張り恋し感溺して見なければ相手の真相は掴めないと思ふ。冷静なる観察が必ずしも真に触れてゐない。熱と愛とは常に理解の前の条件である」という部分と背中合わせの関係にあるとみていいだろう。

村松は28年に入ると「支那研究を今後生涯の仕事としたい」と言うようになる。村松は同じ『支那漫談』の「序」の中で「私は烏滯がましい話だが、支那研究を今後生涯の仕事としたいと思つてゐる。それも私のは古典でない現実の支那である。漢学といふものが一般人の生活から必然的に衰亡し忘れられて行く現在や将来に於ては、何物かそれに代つて、別の方面から支那を紹介する機関が生れて来なければ、やがて人々の支那に対する理解は皆無となるよりほかはない。さうして見れば、私のやうな浅学者の単なる現実描写の筆の仕事でも幾らか役に立つ時があるかも知れないと考へてゐるのである」と書いている。自分の仕事を「現実描写」という村松は、そこに現出されるものを「現実の支那」、「真相」と自負していたであろう。そして、村松はその時、先に見たように『支那遊記』的なあり方、「何者に対しても自己一流の観方を立て解釈を下さねばやまない」姿勢でもない、また「冷静なる観察」でもない、対象に「恋し感溺」する姿勢を意識している。いいかえれば、村松はここで自分が最初に中国に取ったあり様を再確認しているのである。村松が当初からこれを意識して中国に接していたのかどうかはわからない。ただ、村松がこのスタンスをその後意識し、自分の中で再確認したことだけは確かである。つまり、村松の場合はこの自己規定によって逆に意識的に、対象との緊張を欠いたまま、対象に無媒介に向かって行くという方向を取るのである。

たしかに、村松の中国旅行記の特徴は当初から「古典でない現実の支那」を対象にした点にあった。また、村松は中国を愛し、同時代人として田漢等と接

触した。28年2月郭沫若が日本に亡命してきた時、市川の住居を世話したのもこの人である。しかしながら、そうした村松にも中国の現実が彼自身の思考の枠組みを変えるものとして、自己の認識に变革を迫るものとしては映っていない。むしろ、逆にそれは村松自身の中にある既存の認識、価値観を補強するものとして作用している。少なくとも、結果的にはそうになってしまう。たとえば、先の「南北調停論」も北伐の進展という状況が、「あらゆる国情から云つて当然の帰結」という二分割案になり、「此の際我が日本が率先して此の大事業に着手するのが対支政策の最も高踏的なもの」という主張の基盤になっている。あえていうと、冒頭の濟南事件全面支持表明はそうした村松の、日本の強調介入を常に望んでいた村松の基本姿勢が露骨に、無遠慮にでたものといつていい。そして、そこでは村松が生涯の仕事としたいといつていた「支那研究」というものも、「致頭濟南で戦争がおつ始まつた。が是は何時か一度は来なくてはならない事で、今度は其の時機が到来したまでである。日本の出兵に反対する人は必ず支那を少しも知らぬ人で、少しでも支那を知つてゐる者は必ず出兵を当然だと見る点に於て一致して居る。而して形勢が斯の如くなつた以上は日本は徹底的にやらなければならぬことは勿論である。我々のやうに田中内閣には共鳴しない人間でも支那に対する強圧政策の必要はたうから認めてゐる。相手が支那の兵隊だから戦は勝つにきまつてゐるが後始末が大変だ。爰に於てか私達の提唱する支那研究は目前の緊喫事となつて来た。兵隊に行けないからそんなことでいくら働いて見よう」と位置づけられてしまうことになる。

こうした村松にとって、28年11月の中国旅行は彼が中国という現実から何ものかを汲み取る最後の機会だったといつていい。村松はこの時「国民革命を完成したといふ支那はどれ程新しくなつたか！ どれ程良くなつたか」を見るために旅立つ。だが、彼はこの時の印象記『新支那訪問記』（騒人社書局 昭和4年5月）の「序」で「私は努めて当面の政治問題に触れず、主として自己及び周囲の生活気分にあつて観察を試みた。それは文学者たる私の職能の然らしむるところでもあるが、単なる形治批評は此の種の仕事の中では最も低級なものだと私は考へてゐる。端的に云へば、政治は行ふべきものであつて批評す

べきものでない。政治は刻々流動する。爾後の政治批評は無意味であり而して未来は占ひ難い。張作霖の爆死を何人が占ひ得たか。政治に興味を有つ人は須らく論をやめて実行に移るべきだ。我が国の学者論者の多くが支那問題に対して常に尻馬的論評を放つて甘んじてゐる風があるが、其の効果について疑問を抱かざれば不思議だ。私が、新支那研究の第一歩を此の辺から踏み出した理由もこれで解るだろうと思ふ」と書いている。彼はここで一時期彼が目指した「政治と文芸との一致」における「政治」というものも、彼のいう「文学者たる私の職能」から切り放してしまう。では、「政治」をも切り放した村松の前に残っている中国とは何か。それはもはやその時々に移り変わる、純然たる対象としての中国、つまり「相」としての中国だけである。

『新支那訪問記』を読むかぎり、彼が現実の中国を見せつけられ、その判断を求められたことが少なくとも二度あった。一度は「支那の青年数名と済南問題を話した時」、そして、いま一度は日本領事館で前田河広一郎、O領事、S中佐、K中佐等と「日支交渉たるもの」について話した時である。だが、その時の村松はもはやこう書くしかなくなっている。「所謂日支交渉たるもの、前途に対してある暗示を得たやうに感じた。けれども私はそれがどうあろうとも結局私にとっては大した関心事でない。……中略……支那がどうなるか私には解らない。私はすべての現状を肯定するのほかはない。そして、此の現状に変化が生じた時にも、矢張り次の現状を同じやうに肯定するであらう。私の支那に対する感情の中には国家もなければ階級もない。私は支那の自然を愛し、人間を愛し、芸術を愛し、食物を愛する。かるがゆへに支那へ来たのである。見よ、私と、今私を乗せて走りつゝある黄包車との間には国際観念もなければ階級意識もない。彼は空々寂々としてノロノロと車を曳つぱつてゐる。私は、彼が支那人であつて自分が日本人であるといふことは考へてゐない。私は彼の妻子が私の妻子と同等の生活をしなければならぬものだといふやうなことは考へてゐない。ただわれわれの頭の上に朧ろ月があり、辺に汚ない壁があることだけである。南京城内の街はずれは只静かで平和である」、と。

村松梢風と中国ということでは、村松はこの旅行を機に後退したといっ

ていい。

- 1) 佐藤春夫「人間事」『風雲』(昭和16年8月 宝文館)所収。
- 2) 田漢の伝記的事項、日本留学時代などについては拙稿「創造社と日本——(若き日の田漢とその時代——)」(付、田漢年譜稿・及び資料目録)(伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代日本における中国と日本』昭和61年10月 汲古書院 所収)をご参照いただきたい。
- 3) 本論に出て来る創造社同人の伝記的事項については拙稿「創造社年表」(伊藤虎丸編『創造社研究』1479年10月 アジア出版 所収)をご参照いただきたい。
- 4) 村松梢風「詩謎」『支那漫談』(昭和3年3月 騒人社)所収。
- 5) 「編輯後記」(〈騒人〉第1巻第1期 26.4.1)。
- 6) 村松梢風「来朝せる田漢君」(〈読売新聞〉昭和2年6月25日)。
- 7) 田漢「我們的自己批判」『田漢文集、第14巻』(1987年2月 中国戯劇出版社)所収。
- 8) 〈孤軍〉派の機関誌〈孤軍〉第2巻第7期(24.11)に掲載された〈醒獅週報〉の広告には発起人14名の中に何公敢と田漢の名がある。
- 9) この時の田漢の行動は当時の新聞や秋田雨雀の日記などによってかなりのことが裏打ちできる。沈仍福編「南国社大事記」(〈中国現代資料叢刊〉8 84.7)で田漢来日を7月26日、帰国を7月31日としているのは誤りである。田漢は「我們的自己批判」の中で弁明のためにこの時の日記を引いているが、その日付が7月で、「南国社大事記」はそれに依拠したのであろう。
- 10) 田漢「怒吼罷中国！」『田漢散文集』(1936年7月 今代書店)所収。
- 11) 「編輯後記」(〈騒人〉第2巻第2期 27.2.1)。
- 12) 村松梢風「不思議な都『上海』」(〈中央公論〉1923年8月号)。
- 13) たとえば、長与善郎など。長与善郎と中国とを取り上げたものとして祖父江昭二「『大正文学』理解の一つの視点——長与善郎における非歴史的発想を中心に——」(〈文学〉1964年12月号)などがある。

(埼玉大学助教授)